

氏名	かわしま たかし 川島隆
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第321号
学位授与の日付	平成17年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	カフカ文学の中国・中国人像

論文調査委員 (主査) 教授 西村雅樹 助教授 松村朋彦 教授 吉田 城

論文内容の要旨

19世紀から20世紀への転換期は、ヨーロッパにおいて東洋の文学・思想が流行した時期の一つである。そこでは中国や日本などの東アジアの文物が愛好され、名だたる詩人らが競って漢詩を模倣していたのみならず、老荘思想を中心とする中国思想の再評価が大幅に進んだ。この時代の空気を受けて、作家フランツ・カフカもまた、いくらか中国の文学や思想に親しむことがあったと伝えられている。ただし、カフカが中国文化に対して抱いていた関心は、同時代人のあいだにあって決して格別に深いものとは言えず、彼が中国・中国人をモチーフとして書いた作品も分量的に多くはない。ところが、かつてヴァルター・ベンヤミンやエリアス・カネッティは、カフカという作家そのものに「中国的な」要素を見出し、それを老荘思想などと関連づけた。この見方の影響圏内にいる研究者たちには、カフカの文学や生き方と「東洋的なもの」の親和性を強調し、カフカが東洋文化から受けたインパクトを過大に評価するといった傾向が見られる。

時代性を無視した特権的性格をカフカに付与しがちであった以上の研究方向に対し、本論文での考察は、カフカが中国に対して抱いていた関心の範囲と方向性を限定して捉えることを目指している。その関心は徹頭徹尾、強く時代の制約を受けており、彼の描いた中国・中国人像は、基本的に西洋社会における旧来のステレオタイプの範囲内にある。そのことを踏まえた上で、カフカにとって中国や中国人の表象がいかなる特殊な意味を担っていたのかを検証したならば、この作家の「東方幻想」（オリエンタリズム）が絶えず性愛をめぐる問題系と結びついていたという事情が明らかになる。

カフカが作家活動を行っていた20世紀初頭は、性愛の問題が個人的な領域を超え、人種や民族といった集団のアイデンティティー問題と高度に結びついた時代であった。これはまた、カフカの周辺の人々が身を投じたシオニズム運動のように、民族集団を新たに共同体として再構築することを求める運動が活発化した時期でもある。そこで構想された共同体の建設は、そのうち無視しがたい部分が、ジェンダー役割の見なおしや性モラルの再定義などを通じてなされるべき事業として位置づけられていたのである。その背景には、女性の社会進出など急速な社会構造の変化により、「男性」というアイデンティティーが危機に陥っていたという事情があったと思われる。その危機的状況の症候として、例えば当時オットー・ヴァイニングが『性と性格』（1903）で提示した「両性性」の仮説に見受けられるような、己れのうちに異質な要素が混ざることの不安がある。そうした状況下で、曖昧になった男女の境界線を引き直し、不安定となった自己像を確立することは、自己の対蹠物としての他者像を定式化し、それを排除するにも等しい試みであった。その際、非西洋社会における「前近代的な」性役割、すなわち厳格な「男女の分離」にもとづく秩序が、ときに目指されるべきモデルとして捉えられることになる。その例として、本論文では、特に20世紀初頭のドイツ語圏における「黄禍論」に着目している。そこでなされていた、「黄色人種の脅威」への警戒感を煽り立てることを意図したはずの言説は、往々にして自ら「黄色人種化する」ことへの欲望を垣間見せている。その点に着目することで、男性という規範について西洋文明の抱えるディレンマにも光が当てられる。主に考察の対象としているのは、義和団の乱への介入戦争の際にドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が行った戦意発揚演説（1900）、プラハの倫理学者エーレンフェルスの優生学的な著作『性倫理』（1907）、およびドイツ宮廷での同性愛スキャンダルを諷刺

したカール・クラウスの評論『万里の長城』（1909）である。

自らの男性性への不安から中国の風俗へ関心を寄せたという点で、カフカは以上の黄禍論者たちと一定の前提を共有している。彼は、1912年から始めたフェリーツェ・パウアーとの文通において、異性との結婚生活と自らの文学活動とが両立したいことを表現するため、自身を「中国人学者」になぞらえて語るのを好み、男女を厳格に分離する「東洋の婚礼風習」を礼賛してみせた。これは、女性に対して排他的かつ男性中心主義的であると指摘されるカフカ文学の特徴と、彼の東方への関心とが結合した例である。ただしカフカの場合、自らの男性性としての能力の欠如を表明するための手段として「中国人学者」の像が引き合いに出されているのが特徴的である。それは、黄禍論の文脈に見られる攻撃的な黄色人種像に比べて、「非男性的な」中国人という伝統的なステレオタイプに重なる部分が多い。これには、カフカの愛読書であったハンス・ハイルマン編訳『中国抒情詩集』（1905）が影響を与えたと考えられる。ハイルマンは、同時代に流行した黄禍論を反駁するべく、中国民族の平和的性格、非好戦的性格を強調するあまり、かつて思想家ヘルダーが『人類歴史哲学考』（1784-1791）で定式化したような、中国人における男性性の欠如を改めて主張したのである。結果としてハイルマンは、李白や杜甫などの詩人たちが一種の男性同盟を結び、「非男性的な男同士の絆」を謳い上げているという中国社会像を提示することになった。この像は、カフカの処女作とされる『ある闘いの記録』A稿（1904-07?）中の、「東洋風の」意匠を施された一場面における男同士の関係に、すでにその反映が見られる。

その後、主に恋人フェリーツェとの関係を通じて、「中国人」の像はカフカの中で、自身の抱える、市民社会の父権的＝異性愛的な性秩序への不適応、および他者とのコミュニケーションの不可能性といった問題を象徴する地位にまで高められていく。それを総括したものが、初期代表作である『判決』（1912）の自己パロディーとして書かれたとおぼしき1917年の断片および同年の短篇『十一人の息子』に共通して見出される「中国人学者」像である。この像が、「文化シオニズム」の指導者の一人マルティン・ブーバーが行っていた中国文化紹介を介して、当時のユダヤ民族運動との接点を有していることを本論文では示している。ブーバーは、それまで西洋社会において中国の宗教の代表として知られていた儒教に代わって道教（老荘思想）に光を当て、その神秘主義的色彩を強調することで、中国・中国人像に従来とは異なる新たなニュアンスを付け加えることに寄与した。彼が『莊子』や『聊齋志異』のアンソロジー、論考『タオの教え』（1909）などで行った異文化紹介の仕事は、実のところ彼のユダヤ民族主義上のプログラムと連動しており、特に、民族主義との関連でなされた文学者の使命の規定に深く関わっていた。カフカの描いた「中国人学者」像は、以上のようなブーバーの立場へのラディカルな批判的応答を含んでいる。

ただしカフカは、民族主義に対して常に批判的にのみ対していたわけではない。やはり1917年に書かれた大部の中国物語『万里の長城が築かれたとき』は、孤独な「中国人学者」として自らを理解するカフカが、同時代のシオニズム運動へ最大限の共感を表明したアレゴリー作品と位置づけられる。この断片は従来、ともすれば民族主義イデオロギー批判として捉えられがちであった。しかし、ブーバーのシオニズム言説、およびブーバーの長年にわたる盟友であった社会主義者グスタフ・ランダウアーの思想を参照すると、むしろカフカが同時代のシオニストたちの「労働」へ深い敬意を抱いており、それを『万里の長城』における「分割工事」モチーフに託していたことが見えてくる。大戦中にシオニズム運動が現実的な成果の望めない事業、すなわち断片的な「分割工事」として一般に理解されていた限りにおいて、同じく断片的な文学活動に従事する作家としてのカフカは、自民族のナショナリズム運動への連帯を表明することができたのである。「労働」へのカフカの関心が持続的なものであり、その同じ文脈中に、クロボトキンの無政府主義思想への彼の関心や晩年のパレスチナ移住計画があったことは、第一次大戦期に書かれた断片『カルダ鉄道の回想』（1914）および『無産労働者団』（1918）を『万里の長城』に連なるシオニズム寓話として性格づけることで明らかになる。これらの作品でカフカが描きつづけた「労働」は、常に「男女の分離」を実現するようなものとして想定されているが、これは、主として未婚の青年男性によって担われていた戦前のパレスチナ移住運動の実情に合致している。婚約と婚約破棄をくり返した女性フェリーツェとのあいだで、互いに物理的には切り離されつつ精神的な絆を確保することを夢想していたカフカは、自らの求める理想の生活形式を当時のパレスチナ入植活動に見出し、それを自作で形象化したのである。

1917年の中国物語群からやや時間を置いた1920年、カフカは集中的に中国モチーフの作品を生み出している。これは先行する作品群と同様、やはりユダヤ人問題を扱ったものと考えられるが、しかし「建設」の熱気が描かれていた前者と比べて、

ユダヤ的=父権的な社会秩序の閉塞的な空気のみがさわだっている。その作品成立は、カフカ校訂版全集の年代推定に従うと、作者が読んだとおぼしき哲学者バートランド・ラッセルのロシア紀行文に触発されたものと考えられる。したがって、このときの中国物語群を論じるためには、まずカフカにおける「中国」と「ロシア」の像の関わりに目を向ける必要がある。両者は当時のヨーロッパで、ともに「東方」として似通った含意を担う表象であり、ドストエフスキーを中心とするロシア文学の流行は中国文学の流行とも時期を同じくしていたのである。カフカは東方としてのロシアの地に、ヨーロッパ的な市民社会における父権的=異性愛的な秩序を転覆させる「革命」の契機を見出しており、彼にとってその地を代表するものは、自分たち西洋社会に同化した「西方ユダヤ人」に對置される「東方ユダヤ人」の存在であった。大戦による東方ユダヤ難民の流入と時を同じくしてカフカが読んでいた革命家ゲルツェンの回想録、特に著者が市民社会の性道徳を批判した箇所は、結婚問題に悩むカフカにとって大きな意味をもつことになる。ところが1920年の中国物語群の端緒をなす『拒絶』末尾では、ゲルツェン回想録中の同じ箇所への批判と思われる記述が、「革命思想」を抱く「若者たち」への批判として提示されている。そのような記述がなされた事情は、作品成立に影響を与えたラッセルの論説を分析することで理解される。そこでラッセルは、ロシア共産党が革命後に特権階級化して一種の「貴族」となり、再び抑圧的な体制を生み出していることを非難していた。中国物語群に含まれる寓話『掟の問題』は、権力者として「掟」を独占する「貴族」の問題を論じた作品である。作中で言及されている「小さな党」とは、おそらくロシア共産党を直接に指すものであり、そのモチーフにはロシア革命の推移へのカフカの期待と幻滅とが表現されていると見ることができる。

『掟の問題』に続けて書かれた物語『徴兵』には、カフカがラッセル論文を手紙に同封して送ったチェコ人女性ミレナ・イエセンスカとの関係が色濃く影を落としている。作中で描かれた、自分の故郷とは別の徴兵に押しかけたあげく徴兵官の「貴族」に拒絶される「異郷の娘」の姿には、ユダヤ人男性とチェコ人（キリスト教徒）女性の「通婚」の挫折の寓意が託されているのである。ここから回顧すると、カフカの中国・中国人モチーフの作品は、常に異性愛的な契機を女性もろとも排除すること、「男女の分離」を文学によって実現することへ向けて書かれていたことが分かる。しかしそれらの作品は同時に、他者との直接的なコミュニケーションが成立しないことを常に前提としつつ、別の形で他者と連帯する方途を模索しつつづけていたカフカの模索の成果でもある。女性が「掟=貴族」に拒絶されるさまを描いた『徴兵』は、ともに「掟=貴族」に拒絶される身として自分自身の姿をも作中に描きこむことで、カフカが文学上で女性との共同性を追求した稀有な例でもある。これは、女性的なものとの和解の空気が支配している絶筆『歌姫ヨゼフィーネ』（1924）へと、直接につながっていくものである。

論文審査の結果の要旨

プラハ生まれのドイツ語作家フランツ・カフカ（1883-1924）は、ドイツ文学の世界で現在もっともよく論じられる作家の一人であり、その文学については実にさまざまな観点から探究が試みられている。そのうちの一つに、カフカにとっての中国や中国人の像を問うものがある。ただし、カフカの作品には中国や中国人への言及がさわだって多いというわけではない。にもかかわらず、ベンヤミンやカネッティ等がカフカ文学における中国的要素を指摘して以来、カフカへの中国の影響は少なくないとされてきた。論者はこれを過大評価だとする。論者の見るところ、カフカの中国・中国人像は、時代の制約下にある東方への幻想と言えるものであり、それ自体は特に目新しいわけではない。しかしそのような東方幻想を、論者は論ずるに値するものとみなす。なぜならば、これはカフカの性愛をめぐる一連の問題と深く結びついていたからである。しかも性愛の問題は個人的な事柄にとどまらず、人種や民族といった集団のアイデンティティーの問題とも関わっていた。論者は、カフカの中国・中国人像を基本に据えつつ、それと重ね合わせてカフカにとっての性に関わる自我の問題を扱い、さらに彼のユダヤ人としての意識をも探ろうとする。

20世紀初頭は、「男性」というアイデンティティーが危機に陥っていた時代であった。この時期には、曖昧になった男女の境界線を引き直し、不安定となった自己像を確立する試みが見られた。その際、非西洋世界における厳格な男女の分離に基づく性秩序が望ましいものとされることがあった。その例として論者がまず取り上げるのは、カフカの「フェリーツェへの手紙」である。そこには、自らの男性としての能力の欠如を表明する手段として、ハイルマンの編訳書『中国抒情詩集』の中の「中国人学者」の像への言及が見られると論者は指摘する。「非男性的な男同士の絆」という像は、処女作とされる

『ある闘いの記録』A稿中の、東洋風の意匠を施された一場面においても見られるという。論者は、この頃盛んに唱えられた「黄禍論」においても、表向きの意味合いとは異なり、黄色人種の間で見られる性秩序への願望が隠されていることを読み取り、ヴィルヘルム二世の演説などを通して明らかにしている。さらに、カフカにとって「中国人」の像は、市民社会の父権的性秩序への不適応、および他者とのコミュニケーションの不可能性という問題を象徴するまでになった。初期の代表作『判決』のバロディーとみなしうる1917年執筆の断片および同年の短編『十一人の息子』に表されている「中国人学者像」に、それはよく示されているとされる。またこの「中国人学者像」は、ユダヤ民族主義上のプログラムと連動してなされた、ブーバーの中国文化紹介への批判的応答ともみなしうると指摘される。カフカはユダヤ民族主義に批判的に対していただけない。論者の見るところでは、カフカの中国関連の代表作『万里の長城が築かれたとき』（1917）には、同時代のシオニズム運動への最大限の共感が示されている。このアレゴリー作品には、シオニストたちの「労働」への深い共感が読み取れることが詳しく論証されている。カフカの作品としては一般にはあまり知られていない、第一次大戦中に書かれた『カルダ鉄道の回想』や『無産労働者団』にも、論者はパレスチナ入植活動での男女の分離への共感の寓意を読み取っている。1920年に書かれた一連の中国モチーフの作品には、ユダヤ的・父権的な社会秩序の閉塞した空気がきわだって見られるとされる。これらの作品の執筆の動機を与えたものとして、論者はラッセルのロシア紀行文に注目している。また、東方としてのロシアの地においてヨーロッパ的市民社会の父権的秩序が覆されうるのではないかというカフカの期待、ならびにその後の幻滅が、ゲルツェンの回想録の読書録からも跡づけられている。これら晩年の中国・中国人モチーフによる作品群においても、異性愛的契機を女性ともども排除することが目指されてはいる。しかしこの時期の作品は、論者によれば、カフカが他者との直接のコミュニケーションが成立しないことを前提としながらも、別の形で他者と連帯する方途を模索しつづけていた成果でもあった。

以上のように、カフカの東方への関心を軸として、彼自身の性の問題ならびにユダヤ人意識を総合的に扱った本論文は、カフカ研究のうちの主だった三つの方向、すなわち、異文化との関係、セクシュアリティ、ユダヤ人問題を問う研究方向を引き継ぎ、新たな視点を打ち出したものとみなしうる。カフカという個別の作家の文学についての分析の鋭さに加え、同時代の文化や社会の動向にも十分留意するという視野の広さは、文章表現力の豊かさともあまって、本論文を高水準のものとしている。

論者の文献処理の能力ならびに収集への熱意も高く評価できる。一次文献に関しては、近年刊行された信頼できる全集類がある場合にはそれに拠り、ない場合には発行時の書物や雑誌にあたるという作業が確実に行われている。二次文献に関しても、カフカについての研究書や論文だけではなく、本論文中で言及されている他の分野についても、最新のものにいたるまで多くの文献に目が行き届いているのは称賛に値する。

このようにきわめて高く評価できる本論文にも望むべき点がないわけではない。一部の章においては、カフカの作品からもう少し多く引用されておれば、説得力がさらに増したと思われる。また本論文では、寓話風の作品に一定の解釈が施されている。それはそれで一つの優れた解釈と評価できるが、論者も自覚している通り、カフカの文学には基本的に他者による一義的な解釈を容易に受けつけないところがある。このような難しさを孕むカフカ文学理解のさらなる深まりを、論者には大いに期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2005年2月18日、調査委員3名が論文の内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。